●入選

【一般の部】

文頭をひとマスさげる律儀さで皿に向かひて猫は待ちをり	長崎県	青﨑　真央
ふらここの高さを競ひあひし子の影やあるらむ公園の跡	滋賀県	碧乃　そら
大谷は子規のカーブを打てるかとふと思ひたり夏の夕暮れ	岩手県	青星　ふみる
神さまとじゃんけんしたら勝っちゃった神さまなんてそんなもんだよ	岩手県	青星　ふみる
前を行く君のジーンズのポケットにはみ出す文庫の量子力学	埼玉県	磯部　真理
二十二のわれにもどりて返信の文（ふみ）つづりたき母の直筆	群馬県	市川　真人
帰りきて遅き昼餉のそののちを包丁研げりもう考へず	群馬県	糸井　孝
ボタン穴とボタン同じ数なれど留め違へれば途端に足りず	神奈川県	岩田　真治
「文子さん認知症だって」じゃんけんで勝ったようにいう母よ　あなたも	富山県	浦上　紀子
戦争はそりゃ嫌だけどと言う声が前を過ぎ行く結語は言わず	群馬県	浦野　千茅
「文」の字のフォントがいいねと言い合って木蔭の風の文学館前	群馬県	浦野　千茅
銃創のある細き腕ささへれば父踊り出す東京音頭	東京都	大岩　摩利
今もなお戦後は続くエラーして負けた試合に戦犯の文字	広島県	大下　ぐりこ
雨凌ぐ傘の文字にはひと四人相合い傘には窮屈すぎる	茨城県	大谷　敏幸
文化祭みたいな恋をしていたね ガムテープ跡だけが残って	群馬県	オオマエ　アンジュ
もう訳の分からぬ父に晩御飯何がいいかと尋ねる母は	東京都	大山　道子
ざくざくと生えるソテツよ怯えずに怒れる人になりたい五月	神奈川県	小野　碧
名物の古文の先生を見舞いしが小さき古木となりておりたり	神奈川県	おの　めぐみ
おやすみの　１０分あとに　お母さん　あたまなでるの　知ってるからね	群馬県	加藤　丈尋
長文を打っては消して深夜二時「おやすみ」とだけ送って眠る	大阪府	花林　なずな
父遺す松本清張文庫本はさまる栞国鉄キップ	宮城県	川合　進
変わらずに一から手作りしてるのにこのスープには君が足りない	東京都	木下　風民

縄文人（じょうもんびと）の活力の源久々子湖（もとくぐしこ）の大和蜆を今し味わう　岐阜県　国枝　三津江

文明と兎の食ひし水芥子お浸しにして我が家も時に　群馬県　熊澤　峻

合掌の月光菩薩見つめゐてふくよかなりしおほはは思ふ　千葉県　黒岡　美江子

ドアノブに水道閉栓の札ヒラリ　そうかあの人もう会えぬのか　大阪府　黒川　泰雄

寄る辺なき眼（まなこ）のままに人形はひそやかならん文楽果てて　埼玉県　黒沢　梓

努努はゆめゆめと読む 知れずともうちやわらかき人でありたい　神奈川県　玄田　生

よく眠るあなたの胸に触れようと心が文字になるわけもなく　東京都　小石岡　なつ海

ばあちゃんが味方かどうか確かめるような目をして孫が見上げる　佐賀県　古賀　由美子

くずし文字のように流れる花筏に十石舟が分け入りすすむ　京都府　後藤　正樹

マンホールの蓋に寝ころび猫はおり青葉の風に吹かれながらに　群馬県　小林　とみ子

街灯のひとつひとつを数えては謝りたき人みな遠く住む　東京都　三枝　雄真

啄木のうす紫と文明の白よ五月をじゃがいもの花　福岡県　﨑山　房子

引き算の命の重み犬のモモ抱っこしたまま針をゆらせり　愛知県　咲山　らか

人類の早期滅亡期待する地球の本音聞くまでも無し　群馬県　桜井　覚

毛筆のとめはね強き文届く友はだうやら達者のやうだ　千葉県　佐藤　和裕

まだ傘をさすまでもない雨粒を怒りのままに舌で殴って　千葉県　沢本　和樹

傍らに付箋ばかりの文庫本巻頭信綱一〇五の歌人　新潟県　七里　松枝

一本の向日葵の前に立ち竦む　きっと誰かに録画されてる　千葉県　澁川　寿美子

「冷たい」のブラックコーヒーひと飲みに朝の会議のレジュメを刷れり　山形県　菅原　誠

「寝るのにも体力がいる」晩年の母の言葉がこのごろ沁みる　群馬県　鈴木　美幸

手のひらを開いて虫を逃がしたら観音様になった気がした　愛媛県　園部　淳

問いのない答えはあって　本当に君を探してしまうこととか　宮城県　髙橋　健司

長文ですみませんとは書くけれどこんくらいはさ読んでってこと　東京都　髙橋　恵

投稿の母の在所に友ありと文をくれたり土屋先生　群馬県　高橋　恵

モクレンがうちあげ準備完了を妙義に告げて春は始まる　群馬県　田上　薫子

去年猫の座りし石はみぃちゃんと書いた札立て墓標となりぬ（こぞ） 高知県　田久保　ゆかり

お互いにオマエと呼びあうオマエから震えた文字の拝啓がくる 熊本県　谷　たにし

梅雨明けの蝉の抜け殻譲渡会透けるかたちに集る少年 大阪府　谷　まのん

吐瀉物に群がっている鳩たちは世界平和の象徴だった 神奈川県　塚　柊那

山寺の水子供養の風 車吹き上りくる谷風に舞ふ（やまでら　みずこ　くよう　かざぐるま） 高知県　徳永　逸夫

５ペンスの女王切手の封書あり文通の先に世界在りし頃（あ　ころ） 群馬県　戸所　揚子

白百合のまとふ気配は亡くなりし明治生まれの母に似てをり 大阪府　富永　武司

遠き代にわずか五年の「文和」とう我が名と同じ元号ありき 京都府　中川　文和

無駄にうごく孫からもらふ絵手紙のこころあふるるぎこちなき文字 岐阜県　永崎　美鈴

歩行器を手放し君がかろがろと歩く廊下に春の陽のさす 青森県　中村　あつ子

一滴の青墨おとしたように澄む大正池の倒木の息 東京都　新美　喜代男

本当にきれいな時間は長くないブルーアワーの湖（うみ）を見ており 東京都　西澤　京子

はじめての横文字およぐおてがみにSEAWORLDのシャチはジャンプす 群馬県　忽滑谷　三枝子

はじまりは「イノダ」で待つときみの文字阪急電車の伝言板に 京都府　福田　正人

古本の余白の文字に指を置く誰の孤独も紙では軽い 群馬県　福本　真世

あめ玉を手に置くような「ありがとう」ふたりは電車に並んで座り 兵庫県　藤野　椎月

曼殊沙華せつなきまでに蕊のばす傾（なだ）りは死者のこゑ聴くところ 徳島県　松尾　初夏

木洩れきてひとひらを敷きかたばみのはなをさしだす文（ふみ）かひかりは 群馬県　松本　真夜

老いの目にやさしくはなき文庫本けふはここまで木の葉を挟む 群馬県　眞庭　義夫

文鎮を置いたところの字は滲み勢いだけで生きていた頃 福岡県　水の眠り

感動するこころが錆びたと思うとき試しに夕焼け空を見に行く 岐阜県　箕輪　富美子

ニコニコと文句をつけるばあちゃんのシルバーカーはキイキイと鳴る 長野県　宮澤　ななせ

一文字の誤りにより名簿には私ではないわたしがおりぬ 福井県　宮緒　かよ

丸文字も深めに刺さる文語なり「許可を得ずして立ち入るべからず」 茨城県　森　純一

見せどころなきひと文字を丁寧に父は書きけり 一（はじめ） とふ名を 愛知県　森　由佳里

酷暑日を大地を這わず蟻の群れ散水ホースを一列に行く	群馬県	山口　タツ子
何気ない文字に見つける母らしさ買い物メモのとめ、はね、はらい	群馬県	山田　健介
高崎の駅まで父に送られて大和に棲みて四十年過ぐ	奈良県	山田　浩之
文庫本ひらけば前の持ち主のしおりの位置で雨が降りだす	富山県	山田　ゆり菜
ブランコを思い切りこぎミサイルの飛ばない空を見せてやりたし	岐阜県	山本　好恵
透明になりゆく母に文机でしたためたような言葉をかける	愛知県	有野　安津
彼女にはならない君と文化祭終わり静かに見ている花火	東京都	吉田　敦史
影法師は一足先に行きつけの飲み屋の暖簾くぐりていたり	東京都	鷲田　忠保
実りの穂うねらせながら来る風は怖くて少し君を見たっけ	栃木県	渡邉　淳

（敬称略）